

鹿児島県内における英語力に不安を抱える学生への意識調査 —小学校外国語活動の教科化を目前にして—

坂 本 育 生

要旨

鹿児島県内の英語力に不安を感じている大学生、専門学校生に対して英語に関連したアンケート調査を行った。多くの学生が小学校で学んだ英語が中学校において有用に活用しにくかった、また英語が苦手であると答えた。英語力に関しては極端な2極化が進んでいるように見られ、あらゆる教育段階での基礎力向上の英語教育の開発、実施が必要不可欠であることが推測された。

1. 小学校英語教育の利点と懸念

周知の通り2020年度より小学校英語が正課の科目として導入されることが決定的となった。2008年より公立小学校で始まり、2011年からは5、6年生において必修となり、数年の試用期間が過ぎたこととなる。より詳しく述べると2011年度より、小学校において新学習指導要領が全面实施され、5・6年生で年間35単位時間の「外国語活動」が必修化されるにいたった。外国語活動においては、音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として様々な活動を行うという目標のもと小学校英語教育が行われてきたのである（note1）。また現段階では小学校英語教育は領域という段階であり、国語や数学のように数字による評価の対象になっていない。

2018年度からは2020年の完全実施を目指し、小学校の英語教科義務化が進行している。現在の小学校英語教育はHi, friendsやその他の教材、教授法がいくつかあるものの授業の裁量は各学校、教員によって決まっている。また現段階では授業をするために必要な英語力を有する教員が少なく、十分な授業ができない環境にある。その上、正課となれば5年次から本格的な英語教育が始まり、他の教科の授業数の減少、負担、総授業数の増加の検討などの問題も出てくるであろう。小学校5年次、6年次は中学校にあがる前の重要な学年であり、中には中学校受験の準備のための学習を行っている学生も多い。その中での小学校英語の導入は教員側、生徒側への大きな負担になるのは想像に難くない。

小学校英語教育に関しては賛否両論の状態であり、研究者間でも意見が分かれている。利点が多いのは最もではあるが、それ以上に不安の声があがっている。小学校英語の目的としてはおおまかに、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする、などの方向性があり、その他にも多少の書くことについても触

れているが、詳しくは文部科学省のホームページなどを参照されたい。すでに小学校英語は2008年より段階的に始まっており、その利点、懸念については多くの研究者、教員、保護者などから提起されており、多くの意見が出されている。利点としては臨界期を迎える前に英語を学ぶことで成長してから学ぶよりも負担にならなくなる、発音は年少の時の訓練が効果的、英語アレルギーと言える英語に不安を抱えることが少なくなる、などその他にも多数あるが、実際の効果については評価が難しいと思われる。懸念に関しては辛辣なものも多く、学生の負担が増える、英語嫌が増えるなど、詳しく見ると際限がないが、この件に関しては教育環境の問題が今最も関心が高いと思われる。2016年に毎日新聞が高学年を担当する教員100名にアンケート調査を依頼したところ、約半数にあたる45名が英語の正式教科化に反対の回答をし、賛成派29名、どちらでもないという回答した教員は26名であった。現在小学校では英語の授業をする基準まで達した英語力をもつ教員数の確保、英語の正式教科化による授業数の増加への対応、評価の方法など数多くの問題が叫ばれている。これらの問題は早期に解決しなければならないものの2017年現在進展しているとは言い難い状況である。小学校英語の実践報告に関しては多く発表されており、小学校の教員に対して英語研修の実施、補助金を出して英語ができる教員を育成している自治体もある。鹿児島県では薩摩川内市が小学校英語教育を長期間続けており、一定の成果を上げている。しかし、全体への応用は当然ながらまだ難しく、多数の成果を統合し優れた小学校英語教育を作り出すのは時間がかかるであろう。

2. 3年間のアンケート調査の結果

今回の研究に先行していくつかのアンケート調査を行ってきた。英語力、英語教育、民間資格などについての質問に答えてもらったものである。アンケートは回を重ねるごとに加筆修正し、より学生が答えやすいもの、必要とされるものを選びながら新規の質問を加えていった。一連の調査の意義はよりわかりやすく、学生にとって必要な教育法の開発、改善に役立てようとしたものであるが、それと同時に新たな問題も見えてきた。いわゆる英語力と英語に対する関心の問題である。当初は英語において何を学びたいかという問いから優れた教授法、テキストを作ろうと試みてきたが、研究を重ねるごとに学生の英語に対する姿勢の問題を探ることが多くなってきた。筆者は長年大学の英語教育に携わってきたが、年々英語力に不安を抱えている学生を目にするようになり、大学における基礎力向上の教育が必要であると考えてきた。年々その傾向は顕著となっており、大学生だけでなく、中学生、高校生にも英語力に不安を感じている学生が数多くいることがわかってきた。

3. 本研究の目的

今までは大学生、高校生、理系学生などあらゆる分野の学生の英語に対する態度、意識を測ってきたが、今回はより範囲を絞り英語力に不安を抱えている学生に向けてアンケート調査を行う次第となった。今までの調査の結果、歯学部、獣医学部などの大学受験において高い英語力を求められていた学生は基礎力が十分にあると思われ、基礎的な英語教育よりも問題演習を求める回答が多かった。他の学部では学生にもよるが英語力に不安を抱えているようで、文法学習、基本的読解、熟語習得など

の基礎的学習を求めている。大学の英語学習においてはより充実した内容を提供するとともに、学生が今までで抜け落ちていた部分を補うことも重要であると考え、英語力に不安を抱えている学生に対する調査が必要であると考えようになったのである。本研究は主に鹿児島の大学生に向けてのアンケート調査を行い、その結果を考察するものである。その内容の詳細は研究方法と議論の章で詳説している。アンケートを依頼した学生は2011年度から始まった小学校英語教育を受けてきた学生達であり、英語力に不安を抱えており主に基礎教育を望んでいる。

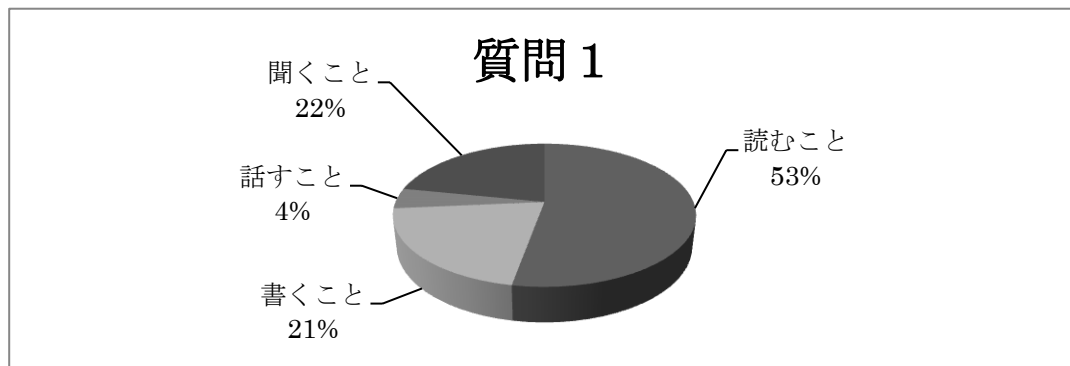
4. 研究方法と議論

鹿児島県内の学生87人を対象にアンケート調査を行った。アンケートは10項目について番号で答える形式となっており、4技能の中で得意なもの、学習意欲、小学校英語が中学校で応用できたかどうか、苦手と感じた時期、資格試験について回答を求めた。集計したデータは100分率で示し、その内容を議論、検討した。

10の質問について個々に検討している。本研究においては英語力に不安を抱える学生に絞っているためか、かなりはっきりした傾向が見られている。

(1) 英語で得意なものは何ですか。あてはまるもの1つをお答えください。

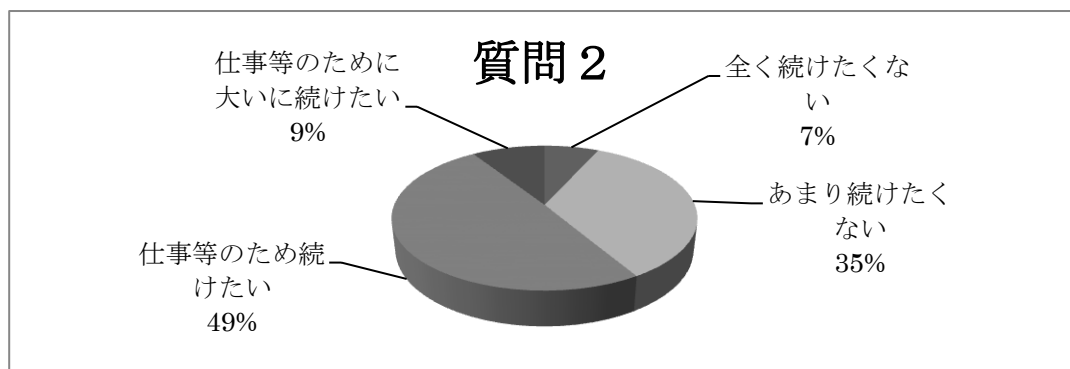
1. 読むこと 2. 書くこと 3. 話すこと 4. 聞くこと



現在までに行ってきたアンケート調査でも読むことを得意と答える学生が多いが、主だった理由が他の3技能を不得意としており、結果的に学習量の多い読むことを選択する学生が多いことが予測される。現行の受験制度では読むことを重視しているため英語教育も英文読解に特化している状況を反映しているともいえる。

(2) 大学以降も英語学習を続けたいと考えていますか。

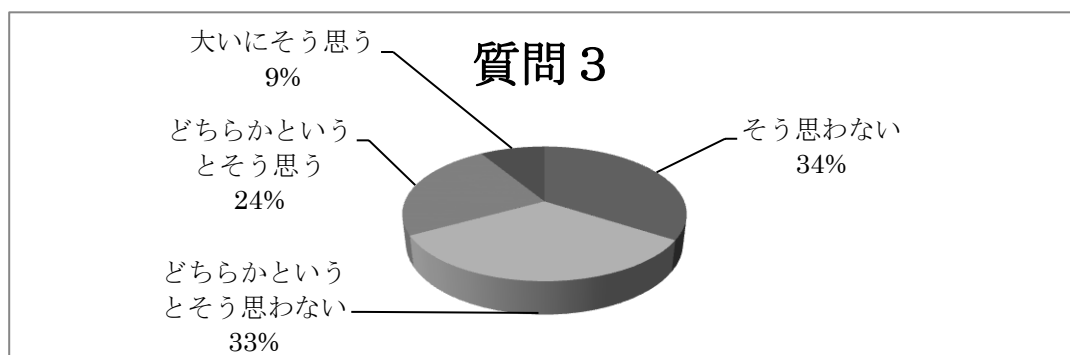
1. 全く続けたくない 2. あまり続けたくない 3. 仕事等のため続けたい
4. 仕事等のため大いに続けたい



今回の回答者が英語に不安を抱えている学生なのである程度の子想はついたが、苦手意識と学習意欲の関係は密接に関連していると思われる。また苦手であっても仕事、試験などの理由によって学ぶという姿勢は必要性を意識しているためと思われ、外的要因もまた影響を与えているのは先行研究からも見られた。どちらにしても基礎力向上の講義が求められていることは言うまでもない。

(3) 小学校から中学校に進学した際に、小学校から学んできた英語が中学校で活用できましたか。

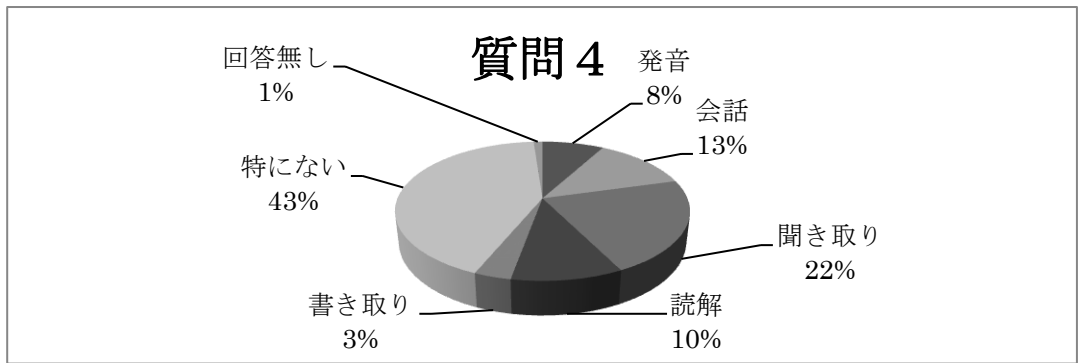
1. そう思わない
2. どちらかというと思わない
3. どちらかというと思おう
4. 大いに思おう



今回のアンケート調査で最も重要と思われる質問であるが、上記したベネッセ総合学習研究所（2017）の追跡調査のデータでは約29%の学生が小学校で学んだ英語が中学校ではうまく利用できなかったと答えていた。今回アンケートを依頼した学生たちは主に2011年度から始まった小学校英語の授業を受けてきた学生たちで、うまく小学校英語教育になじめなかった可能性がある。ただ学校や地域での格差があるので一概には効果がないとは結論付けることはできない。その上小学校英語自体が中学以降の受験英語を意識しているわけではないのでこのような結果はありえるであろう。

(4) 小学校英語を学んで良くなった、改善したと思われる項目を選んでください。

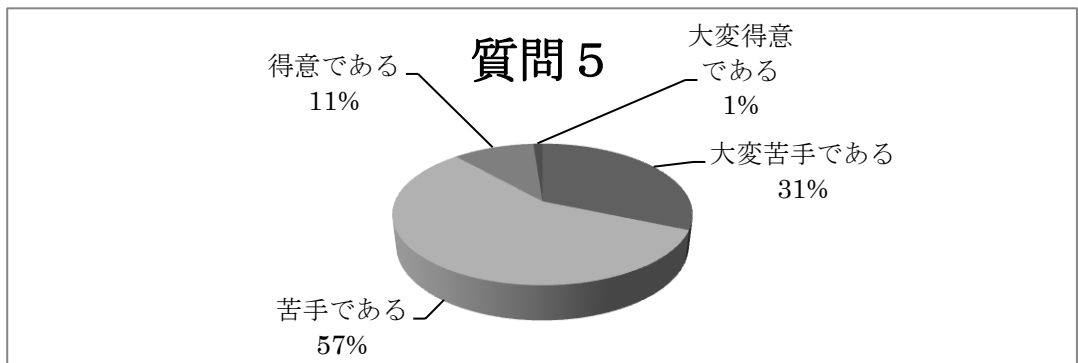
1. 発音
2. 会話
3. 聞き取り
4. 読解
5. 書き取り
6. 特にない



当初の予想では発音の項目に多数の回答が集まると予想していたが、実際は聞き取りが5つの項目の中で最も回答が集まり、特にないと答えた回答が一番多かった。現行の小学校英語は中学校での受験英語を意識しているものではないため問3と問4での回答は許容できるものではあるが、2020年度からの小学校英語教育は評価対象となり、基本的に4技能を評価することになることを考えると教育の改善が必要であろう。

(5) あなたは英語が得意ですか、それとも苦手だと思いますか？

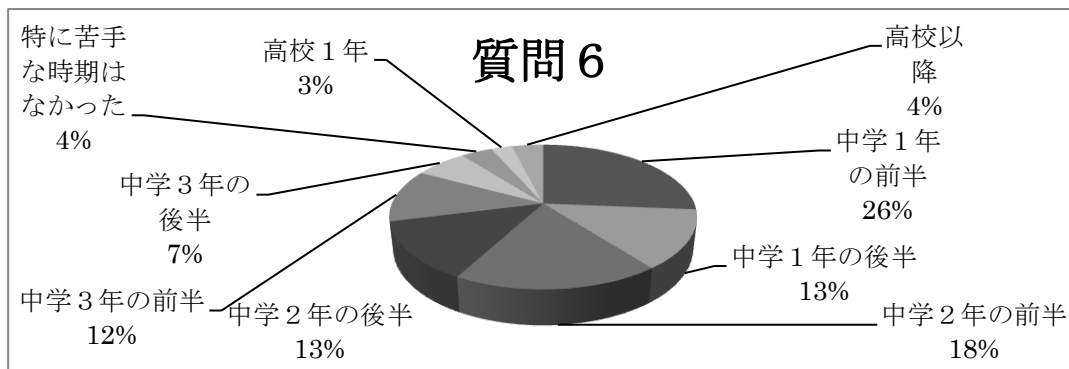
1. 大変苦手である
2. 苦手である
3. 得意である
4. 大変得意である



今回のアンケート調査を依頼した学生は主に英語を苦手としているため結果は予想通りである。しかし回答者は少なくともかなりの割合の学生が苦手と感じている状況は基礎力向上の講義の必要性を求めているようである。

(6) いつ頃から英語を苦手と感じるようになりましたか。あてはまるものの番号を1つお答えください。

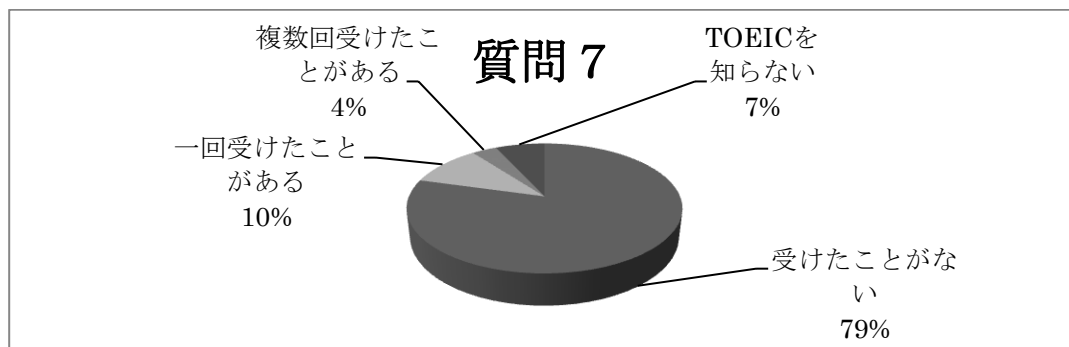
1. 中学1年の前半
2. 中学1年の後半
3. 中学2年の前半
4. 中学2年の後半
5. 中学3年の前半
6. 中学3年の後半
7. 特に苦手な時期はなかった



(6) と類似の質問を過去のアンケート調査で行ってきたが、主に苦手と感じた時期はベネッセ（2014）の研究結果どおり中学2年時の後半に多くの回答が集まっていた。しかし今回は中学1年前半に英語学習が困難であったとの回答が集まった。ベネッセ（2014）では高校1年前半もまた英語学習を困難と考える学生が多いとの報告があるが、中学校から高校にあがると英語教科書、授業が急に難しくなるのも理由の一つであろう。今回中学1年前半にそのような回答が集まったのも小学校と中学校との橋渡しの時期であることが象徴的である。

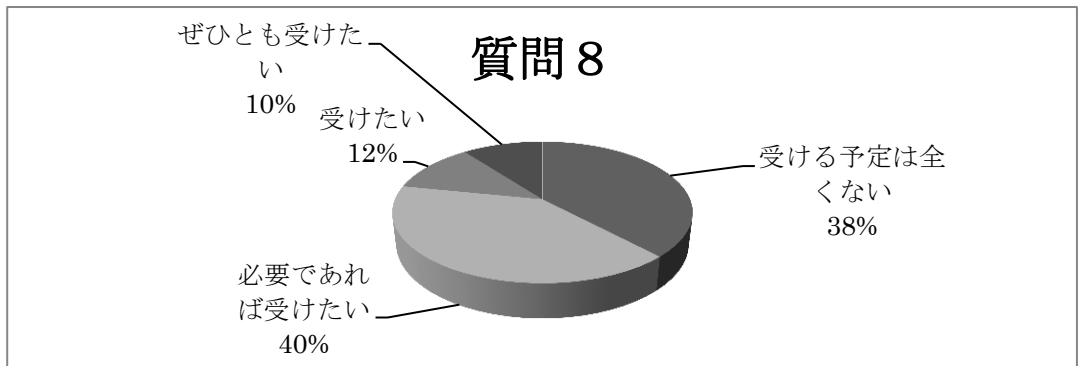
(7) TOEIC（Test of English for International Communication）を受けたことはありますか。

1. 受けたことがない
2. 一回受けたことがある
3. 複数回受けたことがある
4. TOEIC を知らない



(8) TOEIC を受けようと考えていますか。

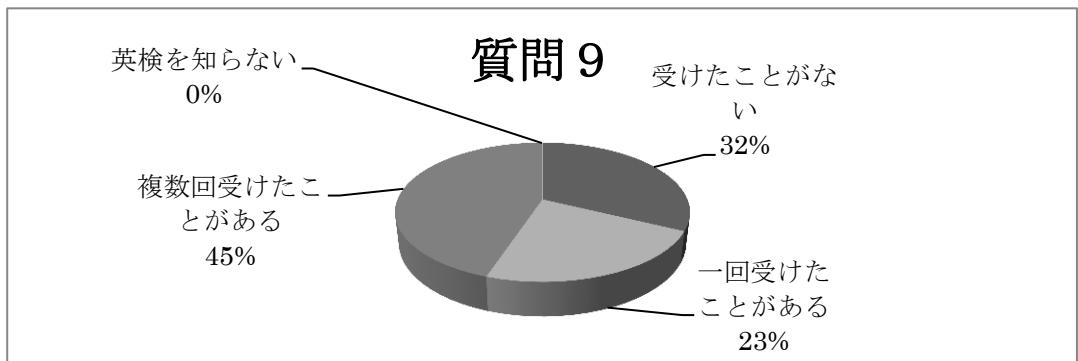
1. 受ける予定は全くない
2. 必要であれば受けたい
3. 受けたい
4. 是非とも受けたい



TOEIC に関しては受講者の少ないことは予想通りである。大学入試に民間資格が導入されるため、今後受講者も増えるであろうが、まだまだ申し込み方法や価格の問題、主たる TOEIC はリーディングとリスニングのみ評価であるため浸透するにはまだ時間がかかるであろう。ただ鹿児島大学では鹿児島大学生協より正規の価格より 1000 円安く受験できるため、理系学生を中心に受講者は多い(注 2)。

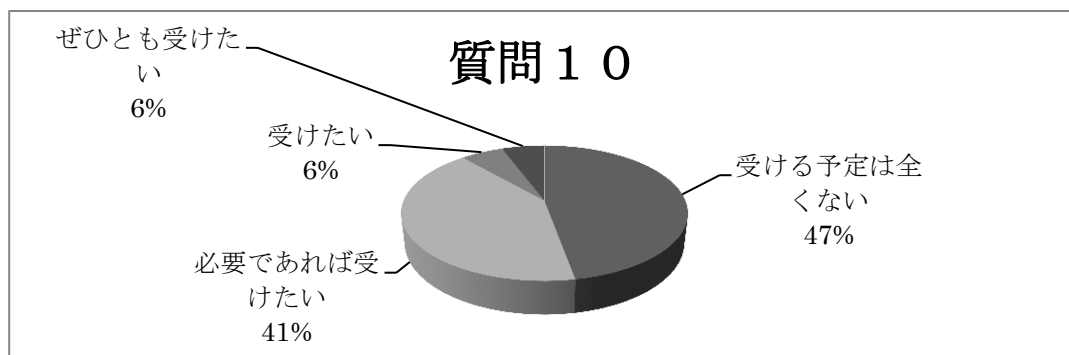
(9) 実用英語検定試験 (英検) を受けたことはありますか。

1. 受けたことがない
2. 一回受けたことがある
3. 複数回受けたことがある
4. 英検を知らない



(10) 英検を受けようと考えていますか。

1. 受ける予定は全くない
2. 必要であれば受けた
3. 受けた
4. ぜひとも受けた



実用英語検定試験は日本で最も有名な英語資格試験のため受験経験者は多く、大学入試でも採用されるのが濃厚である。ただ、大学以降では単位修得のためにつかうほどで、英語学習の指標として使う学生以外にはなかなか受験はしないようである。特に今回の回答者は英語力に不安を感じているため、受講するまでには至っていない学生が多く見られた。

終わりに

ここ3年間様々な学年、分野の学生にアンケート調査を行ってきたが、年々英語に対する意識が変わってきているように感じるのには驚きである。今までは優れた教育を行うことによって、その内容を学生が受け入れ学習意欲が増していくものだと考えていたが、高い水準での学習を行ってきた学生を除けば、想像以上の数の学生が基礎的な教育を求めているという事実があることに気づくばかりである。この原因は一概に言えず、英語教育においてはどの教育段階でもそれぞれの利点と問題があり、解決は一筋縄ではないことは周知の通りである。小学校英語においても問題が数多くあり、さらにその上の学年でもやはり類似、または新たな問題があるように思える。現在多数の英語教育法があり、4技能別に特化したもの、たとえば、シャドーイング、速読、聞き流しなど、枚挙にいとまがないが、根底となる基礎力向上はあまり重視していない可能性がある。今までの調査の結果非常に多くの学生が単語力、文法力、読解力の向上を訴えてきている。2020年度の小学校英語教育の開始後、英語教育は何だかの形で変容している可能性は高いが、土台となる英語基礎力にもっと焦点を当てるべきであろう。

注

- 1) 現行の小学校英語の計画では受験を意識した中学校以降の英語教育との連携を重視しているのではなくあくまで活動であるのは周知の通りである。
- 2) 理系学部では英語をより必要としている工学部の学生の受験が増えている。

参考文献

ベネッセ教育総合研究所（2017）「中1生の英語学習に関する調査」ベネッセ教育総合研究所

根岸雅史、酒井英樹他(2014)「中高生の英語学習に関する実態調査2014」ベネッセ教育総合研究所

坂本育生(2011)「水産学部専門英語に関する基礎研究」 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA) No.35、pp. 37—48

坂本育生(2012)「ESP教育の研究と開発 — 海事英語を出発点として」 鹿児島大学教育学部実践研究紀要、No.22 pp.83—90

坂本育生(2013)「ESP教育の研究と開発 — 海事英語を出発点として—」 鹿児島大学言語文化論集 (VERBA) pp.55—63

坂本育生(2015)「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究(1)」 鹿児島大学教育学部研究紀要 第67巻 pp.71—79

坂本育生(2017)「中高一貫校における現代英語教育の意識調査研究—学生の得意不得意を中心として—」 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第26巻 pp.217—224

坂本育生(2017)「鹿児島大学の理系学生の英語学習傾向の研究(2)」 鹿児島大学教育学部研究紀要